北海道における縄文世界遺産の拠点形成に関する懇談会（第 2 回）議事概要

1　日　時　令和 6 年 8 月 29 日（木）13：00～15：00

2　場　所　函館市南茅部総合センター 講堂

3　出席者

〈有識者〉　木野委員、小林委員、田代委員、永原委員、西山委員、水口委員

〈事務局〉　黒須文化局長、栗原縄文世界遺産推進室長、阿部特別研究員

4　概　要

（1）　縄文世界遺産の拠点形成方針「総論」について

【事務局】

（資料 1 ～ 3 を説明、その後阿部特別研究員が補足）

【阿部特別研究員】

縄文世界遺産の現代的な意味については、今後の事業展開、特にコンセプトメイキングやブランディングなどに関わってくるため詳しく説明したい。

縄文文化には、一般的にはサスティナブル（sustainable）、持続可能な社会や自然との共生といったイメージがある。しかし、世界遺産登録には縄文文化全体ではなく、縄文世界遺産からしか言えないことが必要。推薦書[1]では、1 万年間の中で気候変動等のなかで、変化に対応するレジリエンス（resilience）が重要ということで、サスティナブルという言葉は使っていない。

なぜレジリエント社会を維持できたのか、これは豊かな自然環境の恩恵。縄文時代には、人間は自然の一部であって自然に対する感謝が根底にあると考えられており、日々の食料や土器等の道具にも感謝をしている。現代ではその感謝の気持ちが薄れているが、その感謝を取り戻そうというのが、縄文世界遺産を通して伝えていきたいメッセージ。縄文世界遺産の真の価値は、我々の心の中に既にあって、それを探すこと、がテーマ。

これは教育活動なので、短期では成果は出ない。しかし、自然に感謝をしながら過ごす 10 年後の社会と、ただ消費をしていく 10 年後の社会は、自ずと違ってくると思っている。今、貧困や過度な開発による自然破壊等あるが、縄文世界遺産をとおして少しでも良い社会を作る。それには、自分たちの心を変えていくこと。なぜなら今の社会は私たち一人一人の心の反映でもある。

その活動に大事なのはフィールド。遺跡だけでなく、海や山等の遺跡を支えた周辺の自然環境、その自然に育まれた現代の地域の産業、の 3 つが必要。特に 3 つ目の要素、現在も自然の恵みを感じられるモデル的なフィールドが必要。それが縄文時代と現代を結びつけ、地域のブランディングにもなり、世界遺産になった地域が世界遺産になって幸せと感じられることに繋がる。

【永原委員】

現代における縄文世界遺産の意義は、私たちが失いつつある精神性が凝縮されている文化であることにあると感じた。私たちの心を変えていかないと社会は変わっていかない。

---

[1] Nomination Dossier Jomon Prehistoric Sites in Northern Japan.世界遺産登録推薦書。正式版である英語版、その翻訳である日本語版ともに、https://jomon-japan.jp/archives#/asset/1000 にて閲覧できる。

世界的にもそういったことが問題視されており、精神性に注目するような言葉に関心が高い。日本について注目が集まっている言葉のひとつは Zen(禅)。今日の視察で、縄文は禅と同じぐらい、世界にインパクトを与えられると感じた。この現代的意義に、具体的にどういった言葉を使うのかは、今後検討していく必要がある。

【水口委員】

精神性みたいなものに触れて、ちょっと考え直すとか、気づくようなことを、観光分野ではトランスフォーメーションと言っている。ここに来て、文化に触れて内面が変わった。なにか違うなと思うようになったみたいな場所になれれば良い。そのために、自然環境や産業にも触れる必要があるし、そのための仕掛けも考えなければいけない。

【小林委員】

縄文文化の持つ本質的な意味を再確認しつつ、どの内容をどの世代、どの世界、どのような層に伝えるかが重要である。

以前視察に行ったカナダの民族博物館では、展示物のみならず、建物、そして建物を取り囲むランドスケープが総合的に考えられており、民族の生活と自然観が一体化した生態展示に感動した。建物はもちろん、その周囲の植物も在来種に置き換えていた。

道南の遺跡展示も先住民族が生活していた時に食べていた植物や在来種のススキやササ、そういう中に建っている生態展示でありたい。道ばたにその木の実があったらそれちょっと食べられるというようなことがあってもよい。

どの世代にするかは、次の社会を担う若者、特に高校生が重要。私は現在、T-base[2]と地域みらい留学[3]の高校生と付き合い始めている。

T-base は北海道有朋高校内に設置され、教科・科目の授業を道内 31 校に遠隔配信。T-base に参加している高校の生徒は Web 上で互いのコミュニケーションができる。そこには南茅部高等学校も参加しているので、南茅部での活動に興味はありますか、いらっしゃいませんかと、31 校の生徒に伝えたとすると、縄文文化の共感者が増える可能性が充分にある。

地域みらい留学には、道内 33 校が参加している。地域のことをしっかり考えている地元北海道の高校生や、全国に分布している社会意識を強く持つ子供たちと共感をしながら、縄文文化の価値を伝えることも充分に考えられる。

ツーリズムという視点から考えることは重要。生活者と旅人とのちょうど中間ぐらいの人たちに、的確なメッセージを出すということも大事だと思う。アマンリゾーツと関わっている人たちと話をする機会があり、ツーリズムのターゲット層を 3,000 万、5,000 万、7,000 万円に分けて考えているとのこと。年収ではなく、自分の人生を、自分の価値をより豊かにするために、旅のコストに 1 年間にいくら使うか。それを意識した縄文文化ツーリズムはすごいマーケットに繋がる。日本でも富裕層と言うが、世界の本当の富裕層と繋がっているかどうか考え直すことが今後重要になる。

---

[2]北海道教育委員会が実施している、地元で学びながら大学進学等を実現することを目的とした、ICT を活用した遠隔授業、学校間連携を行うための運営体制に関する取組。

[3] 一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォームが行っている 130 校を超える日本各地の公立高校の中から、住んでいる都道府県の枠を超えて、自分の興味関心にあった高校を選択し、高校 3 年間をその地域で過ごす国内進学プログラム。

この縄文の価値を、いくつかのカテゴリーの層に分け、それに対応するコンテンツを作っていく。そうすると縄文文化を通して次世代の価値観が変わったり、来た方々の生活観が変わる可能性がある。それを世界の中に位置づけていくのが、世界遺産としての拠点の意味ではないかと思う。

【木野委員】

拠点形成には、地域や住民や私たちにとっての未来づくりという創造的な視点が欠かせない。遺跡の存在や歴史、縄文の多様な価値といった遠い過去の記憶や記録と、今を生きる地域の方々の営みや誇りを繋ぐのが大事なポイント。地域の方々が主役であって、共にこれからのストーリーやメッセージを作っていくという視点を持つことが、とても大事。

【田代委員】

日本の歴史教育のなかでは、自分が立っている土地の歴史として、地面の下に何があるかを想像するのが難しい。世界遺産になるにはストーリーが必要で、考古学を中心とし、歴史学、保存科学などの様々な研究者が、断片的に分かったことを説明している。私たちは、その断片的から現代人の視点で何かを抽出して、ストーリーを生み出す。

阿部特別研究員の、サスティナブルであったかと考えるより、共にいる自然とどう向き合ってきたのかを考えるという提案に同意。縄文世界遺産で、今住んでいる方々が食べている魚やクリなどを、縄文の人たちが 3,500 年前にも食べていたのかとか、想像しやすい。そういう自然性を考えながら、北の縄文の世界遺産としてのストーリーを拠点としてアピールしていく、かつそれらは私たち現代社会の人たちが、意識的に作り上げているものであるということを意識しなければならない。現代社会が歴史をつくっていることをも踏まえて、拠点形成のアピールをしていくべき。

【西山委員】

阿部特別研究員の話に同感。また、永原委員が言った、この縄文が発信しようとしているメッセージが「禅」に匹敵するという言葉にすごく反応した。本当は我々のなかにあるものの考え方や価値観、行動様式が失われつつあり、それが縄文をもう一度知ることで立ち返ることができるというような。これは我々にとっては当たり前のことで、我々が殊更に説明することが難しいし、気づくことも結構難しい。今回の大きな方針として、日本人が当たり前だと思っていることが当たり前ではない、外国人に分かってもらえるようにすることを一番の基本にしたらどうか。

日本という島国は世界の中に存在していて、世界史のある部分が日本史。函館市縄文文化交流センターの入口にも世界史と日本史を比べた年表があるが、ただ並べても、分かる人にしか分からない。そういうものをきちんと伝えて、縄文世界遺産を用いて、日本の歴史の何を世界に刻みたいのかをまず伝える。日本で 1 万 2000 年にわたって続いたという歴史が、世界史的に見て珍しい歴史で、これをちゃんと説明し、情報を発信したら、そういうものを知りたいと思う外国人が多い。というようなことを我々日本人はほとんど感じていない。ただ単に日本の一番古い歴史が世界遺産になったと思っているだけ。我々にとっては当たり前だから、特別なものに感じないことと同じように、この縄文世界遺産は我々にとっての当たり前とか、気づかないところに大変な価値があるというその我々自身が持っている歴史のギャップというか、その分からなさをいかに顕在化させてこの拠点施設の中で説明していくかということ。そのターゲットは日本人よりは、外国人が分かりやすい

のだろう。その効果が出たら、5 年 10 年すれば、外国人がこんなにすごいっていうのはなぜと言って、日本人が来ると思う。それを知り新しい自分たちを見つけ出して、先ほど言ったトランスフォーメーションしたくなるような場になる。

縄文世界遺産は、日常に人が暮らしていた歴史が世界遺産になっており、ピラミッドやボロブドゥールみたいな、物自体が我々に訴えてくるものとは違う。その性質を充分に理解して、そのメッセージを外国人に何を説明して、彼らが見ずにはいられなくなる仕掛けをコンセプトの中心にしたらいいのではないか。なので阿部特別研究員が言った内容を、ターゲットを明確に、伝えるメッセージの重点をどこに置くか、戦略的にやる必要がある。

【西山委員】

ターゲットは外国人と言ったが、もうひとつのターゲットは小林委員の言った地元でない高校生。それが外国人に匹敵する我々が必死に伝えたい相手。1 週間ほど前、札幌で縄文世界遺産に関するシンポジウム[4]があった。そこで高校生 2 人が登壇。高校生ぐらいの、ものを一生懸命考え始めると同時に、自分たちが今後どういう風に生きていくかと考えている人たちが世界遺産に対して興味を持つと、世界的な条約に基づくものに日本の文化がノミネートされたり、登録されてきたりしていて、自分たちは知らないを顔しておけばいいのか、それとも関わっていった方がいいのか、そういう若い興味を持つ方々がいるということがある中で、先ほど小林委員が言った考え方、これは教育行政と組んでやれると思うので、単に市場や民間の努力に任せるのではなく、行政も戦略的に戦える。

【小林委員】

15 年ほど前、バリ島に選ばれた世界中の子供たちが参加する 400 人の合宿（グリーンスクール）に 1 ヶ月間ほど参加する機会があった。400 人の世界からの仲間のバリの子供たちは 40 人参加する。6 ヶ月間合宿すると、世界中から来た子供たちが仲良くなり、コネクションできる。本国に戻り、10 年くらい経つとそれぞれ良いポジションで活動している。そうするとバリの子供たちが、その子供たちと濃いコンタクトができ、バリの子供たちも自信を、プライドを持つ。この様な事業とリンクして世界で研修する機会を作ったら、北海道や南茅部の子供たちが世界に飛び立っていく端緒になっていく。そのくらいの幅を持って今回の事業を考えていくことも重要ではないか。

（2）道南エリアにおける取組の方向性について

（3）道南エリアの拠点施設で実施すべき事業について

【事務局】

（資料５に基づき、道南エリアについて説明）

【木野委員】

場所が決まらないと具体的な取組の方向性や実施すべき事業の議論が進まない。そのため、道南エリアの拠点施設は、南茅部地区に置く前提で議論を進めていけたら良いのではないかと思っている。

なぜ拠点施設は南茅部地区に置くべきか、遺跡やその背景となる自然と、今この地域に

---

[4] 北海道世界文化遺産活用推進実行委員会主催「2024 年度ユネスコ世界文化遺産講演会」。2024 年 8 月 24 日開催。

生きる方々の暮らしや文化を繋ぐことや、その共感力がこの計画の中ではすごく大事な欠かせないポイント。また、遺跡は以前からもこの先も地域の中に存在するもので、拠点形成は地域の未来をどう作っていくのかということであり、地域の方々と共に作っていく行動でもある。

今年何度か南茅部に来て、地域の方々と関わる機会を持ち始めている。この地域には、地域の未来を作ろうとしている NPO[5]、森や山をフィールドにした学校や様々な活動が具体的に取り組まれていたり、地元の食材で地域と世界をつなごうとしている方々もいる。そういった地域の主体的な活動があることを尊重しながら、縄文だけ、自然だけ、ではなく、今ここで生きる方々の心とつながるような活動を生み出し、継続していくことが、地域内外の多様な主体との関わりを作り続けていく姿勢が拠点形成では大切な視点。地域の活動や営みと連携したり、共創していくことが切り離せないというイメージを持った時に、構成資産がある南茅部地区に拠点を置くべきと考えた。

【小林委員】

30 年ほど前に文科省の局長・部長を交えた研究会で、大学の博物館のエコミュージアム[6]化をモデルにしながら、日本にエコミュージアムを創出するという方向性を共有する機会があった。エコミュージアムは、義深い拠点とサテライト、それに関わりながら生活している地域住民がタッグを組み、活動や運営をしていこうという考え方。木野委員が言ったのは、拠点とローカルな拠点、そういうものの組み合わせで道南エリアが、世界に光るようなものにしていくことかと理解した。

【西山委員】

エコミュージアムを作ることは、コアとサテライトの関係性、ネットワークを作ること。エコミュージアムは、屋根のない博物館という言い方もよくする。普通の博物館は、物を集めて、それを展示室に並べて、そして分かりやすい順路で色々なテーマを解説していく。エコミュージアムは、地域に点在しているものを、元からある場所に置いたまま保存しながら、それを訪れる人は自分たちが地域の中を渡り歩いていく。地域全体が展示室で、そこに展示されている遺産を展示物と見立てて、見てもらう。そのストーリーを理解しようというのがエコミュージアムの考え方。

縄文世界遺産は、東北も合わせて 17 資産のシリアルになっており、全体でひとつのストーリーを説明している。世界史における日本の縄文の歴史という意味を表現しているのだとしたら、この 17 資産でひとつの大きなエコミュージアムになって欲しい。とは言え、みんなで一緒にひとつとはいかない現実もあり、広域でもあるので、とりあえずまとまりがいい北海道は北海道から先に話を進めていくのは悪いこととは思わない。

今回の拠点施設が、このエコミュージアムのコア博物館にあたるものと考えると、その設置場所は木野委員が言ったように、基本的にはポテンシャルのあるところ、地域の方々がしっかりと支えている機運があり、力があり、既存の活動があること。もうひとつ大事なのは、エコミュージアムは本格的な博物館活動で、単なる観光まちづくりではない点。

---

[5] NPO 法人 Minamikayabe Revive Salon

[6] 住民参加を原則とし、対象とする地域内にコアと呼ぶ中核施設と、自然・文化・産業などが見学できるサテライト等を配置し、来訪者が地域内を主体的に周遊して地域社会をより積極的に理解できるよう構築されたシステム。

学芸活動が充実していることが一番大事。そういう意味では、コアミュージアムを作るとしたら南茅部地区であるということは、大いにまず絶対評価としてはある。

ただ北海道の７構成・関連資産を第１期のエコミュージアムと考えれば、そこに人を巡らせるのに、札幌ではダメなのか、函館市内ではダメなのか、南茅部地区ではダメなのか、といったものを客観的に調査し、それぞれの地域が果たすべき役割、重要な拠点にどのような仕掛けをしてコア博物館に必ず導くかといった全体システムの設計がなくして、どこに拠点施設を置くかという話はできない。私はきちっとした客観的な調査、一般的に言えばコンサルタントに専門的な調査事業をやってもらうべき。そうしないと、拠点施設で何をするかという話ばかりになって、全体の中で拠点施設が果たすべき役割から、どんどん離されていくおそれが。それが、前回から言っているマスタープランを作るということ。マスタープランに基づいた拠点施設の機能を明らかにして、その機能をどこに置くかを考えた時に、それが具体的な場所になる。そういう誰にでも説明できる論理的な説明があって、現時点で木野委員が言うように、ポテンシャルが非常にあって、施設設置の条件が整っている場所として南茅部地区があるとは思います。

【水口委員】

観光で一番大事だと思っているのは地元の方々。観光は地元のためにあると思っている。観光地によってはオーバーツーリズムの問題が出ているが、それはやり方を間違っていて、目指す観光になっていない。縄文世界遺産のような文化の価値は、地元の方々に利益が、観光客が来てくれて良かったなと思えないとやる意味はない。そのため、拠点施設の場所は地元の方々が協力して一緒にやってくれるのか、その熱量はあるのか、また急に拠点だからって言っても地元の方々の熱意が急に上がるわけもない。そこがとても心配。決めたはいいけども、ただ場所が決まっただけにならないよう、併行して考えて欲しい。

【永原委員】

水口委員の話は同感。外部の観光事業者だけが利益を得る搾取型の観光になると続かない、地域資産の価値が失われ、壊れてしまう。本当に日本の魅力を海外の方に知ってもらうためには、そして海外の方々が日本に来る理由、旅の思い出を振り返った時の一番のポイントは人。人というのは地域住民や、特定のことへの知識に長けていて、お話を伺って感動、そういった体験が、海外から来た旅行者の胸に刺さる。そのため、観光の拠点を作る時も、来訪者にどんな体験を提供していくのか、誰がどんな形で関わって提供していくのか、を考えなければいけない。それはゼロから作る必要はなく、答えは過去に遡っていけば見えてくる。南茅部の方々がどのような暮らしをしてきて、どのようなことを大切にしながら、生活をしていたのか。その時の考え方などを共有していく、体験に落とし込んでいく。そういったことができることが非常に大切なので、縄文遺跡も素晴らしいが、それと等しく必要不可欠なのが人材。構成資産の保存と活用に資する人材の育成は大事だが、それが暮らしに密着しているところを外さないようにする必要がある。

【田代委員】

世界遺産教育はいろいろなところで実施されており、ここでしかできない教育を考える必要がある。最初に出てきた北の縄文、縄文世界遺産の価値を考えてそれを伝えていくことから、その教育をどこへ持っていくべきか。奈良では、ユネスコアジア文化センターが、木造建造物と考古学的な遺跡に対する研修を、毎年世界の専門家に対して行っていて、県

も市も協力し、専門家を育てている。道南エリアの拠点施設でも、ここでしかできない何かしらの確立した研修を世界に対して行っていくことで、南茅部だから、縄文遺跡だから、縄文世界遺産だからできることで、特に教育・交流の拠点としての機能を果たした方がいい。地域と一体となって、遺跡がどう解釈され、人に紹介されていく過程も興味深いが、遺跡の展示という意味では、今日訪問させていただいた大船遺跡も様々な方法で、埋蔵文化財を展示する方法を実施しており、ここは木造の骨組みだけ、これは柱の跡だけ見えますとか、色々な展示方法を、あそこでテストしていって、それがどういう風に人に受け止められるのかっていうことを考えるなどでもいいかと思う。

【木野委員】

皆さんが言ったように、地域の方々と拠点を取り巻く趣旨や具体的実践とが、どういう風に繋がりを持てるか、地域の方々がどういうモチベーションを持って臨んだり、関われる余地を作っていけるか、を重視すべき。地域の未来を担っていく子供たちや、子を持つ家族にとって、自分はどんな風に拠点施設に関わったらいいだろうか、未来の風景をどう作るのか、という視点も大切にしたい。一方で、観光で収益を上げたい、それを運営する事業者がしっかり食べられて、夢のある職場でありたいとか、そういう議論もしていきたい。その辺りもマスタープランにつながっていくのかとも思う。

僕はこの地域の方々、この地域の根幹をなしているような大切な産業や、縄文に関わる多くの住民の想い、そういった地域の根っこの部分が計画の太い柱になっていくように取り込みながら、エコミュージアムで地域の各所を巡っていくような、地域の滞在体験するための発信源的な拠点づくりになっていけたらと思う。

【阿部特別研究員】

エコミュージアムの資産は指定文化財等だけではなく、例えば昆布を干しているところ等の地域に根ざした生業、山や川といった自然環境も含めて資産であることを補足する。また、経済システムを併行して作る必要がある。バリューチェーンと地域で収益が分配される仕組みの構築がエコミュージアムの要だと思っている。

【西山委員】

先ほど永原委員が言った外国人にしても、日本人にしても、地域の方々を通じてその物を見たいですよね。様々な遺産に地域の人がどう関わっていくかも含めて、そこに関わっている人を通じて、その深い価値を知りたいとか、住んでいる方がその物にどう触れているかとか、大切にしているかとか、日常の生活の中で付き合っているかとかね。

禅に匹敵する言葉を仮に「縄文スピリッツ」と呼ぶと、この「縄文スピリッツ」が実は日本人の基層にある精神だとすると、外国人の日本人を知りたいと思うニーズに縄文を通じて答えたい。禅もそうだし、サムライスピリッツみたいなものもそのひとつの切り口ですが、もっと根本的なところにこの「縄文スピリッツ」があると考えると、そのエコミュージアムは縄文世界遺産のエコミュージアムではなくて、日本人の精神を探るエコミュージアム、それが縄文遺跡からスタートして、今の暮らしの中にさえあることが理解できるエコミュージアムができたら、どんなに素晴らしいかと思う。「縄文の世界遺産を見てきたけど、日本人のことがよく分かったよ」というような観光形態にしたいと。そのためのエコミュージアムですし、そのコアとしての拠点施設はどうかということ。

【水口委員】

友人がオーストリアの農家の方から聞いた話。「農業が景観を作って、観光がチーズを売っている」。農業が観光客を呼ぶ景観を作り、その生産物のチーズを観光客が買ってくれるという関係を農家の方が認識していることが素晴らしい。こうした観光でありたいと思っている。縄文では何が関連するかは分からないが、函館や南茅部の産業をきちんと観光にし、地域にお金で返してあげればいい。そういう循環の観光でありたい。

(4) 実施すべき事業で必要となる施設・運営手法等について

【西山委員】

山口県萩市、萩まちじゅう博物館というエコミュージアムが多分日本で 1 番成功しているエコミュージアム。何よりの証拠として、20 年以上続き、行政の 3 本柱の中心政策として、市長が 3 人代わっても続いている。

拠点となる施設に必要なものは、第 1 に学芸機能。また、中心となる学芸員の他に地域住民が色々な場面で活躍する。拠点施設での解説、遺跡の解説、場合によっては街中に出ていく。暮らしの中で展開している文化を説明するようなことを全部通して説明するガイドもできる。自宅で商売をしている方が、自宅で商売をしながら、拠点施設で学んだことに基づいて説明する。こういうシステムを萩市では 20 年経って形になってきている。

萩市では NPO 萩まちじゅう博物館を立ち上げ、博物館の雑務的な業務を NPO が委託を受けてやっている。また NPO の職員は単なるアルバイトではなく、学芸班に入り、学芸活動も一緒にやる。KPI のひとつは施設の入館者だが、エコミュージアムを取り巻く関係者、参加する市民がどう増えていくかも重要な指標。それから来訪者の滞在時間の変化。これにはアンケート調査や観察調査が必要だが、活動をする前に来た観光客がどんな観光活動したか、活動始めた後で 5 年 10 年後にどれだけ滞在時間が伸びたかや、消費額、は当然。

萩市では NPO 萩まちじゅう博物館が委託を受けて、20 年間運営管理をやっている。地域と密着し、かつ行政が一定程度の範囲で関与して、PPP（Public Private Partnership）が実施できるような形が望ましい。

【木野委員】

地域が主体性を持つことは大事で、地域にある資源を掘り起こす作業はプロセスも含めて大事。その過程を共創・共有していく活動として例えば、地域住民の聞き取りなど、地元の子供や教育機関、高齢者の方々とできることもあると。

僕は白老町で 15 年ぐらい、地域の資源と向き合うプロジェクトをやってきて、共創する多様な場面を地続きで継続的に行ってきた経験があります。僕が多様な第三者と呼んでいるアーティストや多分野の専門家など、町外の方々と町民との協働を生み続けるために、地域が多様な第三者を受け入れられるような許容、そこで起きる掛け算は多くの可能性に派生すると思っている。地元の生活の中では当たり前過ぎたり、忘れられそうな記憶だったり、地元住民では地元の魅力を再発見したり、掘り起こすような関心・感覚は起きにくい。僕は多分野の研究者や専門家、多種多様な分野を得意とする「多様な第三者」である方々がこの地域を訪れる環境やプログラム造成、それを受け入れられる体制や拠点施設、機能もあって欲しいなと思いますし、地域の人×地域資源×多様な第三者から見えてくる、地域の本物や潜在する魅力、未来的で創造的なアイディアなどを作り出していけるのではないか。そのためには多世代、多様な市民が多様なプログラムに常に参加することができ

るようにすべき。

また、南茅部だけ、地元住民だけ、縄文だけではなく、東部4地域[7]すべてが魅力的。多様な人々の関わりを考える上で大事な視点は、函館市街で活動する感度の高い色々な分野のプレーヤーが東部地域、南茅部に対して関心や興味のアンテナを常に立ててくれるような状況づくり。函館市街で日常的や頻繁に起きているすごくクリエイティブな活動やプロジェクト、そういう躍動感ある動きに惹かれていくような市民やプレーヤーやその予備軍が、南茅部側を向いてくるような、そういった仕掛けは大いにすべき。

僕が見てきた中で先進的な事例として取り組んでいるのは、文化観光を軸にした地域振興の例。新潟県十日町市、瀬戸内海の直島や周辺の島々、珠洲市、別府市。行政と民間が完全に一体になって進めている。それらの取組にはエコミュージアムの発想が取り込まれている。単発的なお祭りで、一定の時期だけ収益上げて終わるのではなく、「ハレとケ」っていうんですかね、ハレの場は祭り的に用意して、国内外向けにしっかりプロモーションをかけて、世界中の人が旅行先として関心を持って訪れたくなるような環境や創造コンテンツを作っていると思うんですけど、大事なのは「ケ」の部分で、日常的に何をやっていくか、日常でこの地域の方々と何を共創・協働していくか、何を学んでいくか、そこにこそすごく価値や意味があって、その「ケ」の時間を共有しながら一緒に共感を育んでいけるからこそ、「ハレ」に向かうっていうんですかね、祭りと日常のバランスを意識した取組は良いと思う。

エコミュージアム的な発想として、縄文に限らず、地域の色々な方々や場所に出会ったり、いろんな産業に出会ったり、地域の暮らしの風景に出会ったり、いろんな食材や食文化の魅力や、それを作った人に出会えるような、地域に根付いている今の文化に来訪者がじっくり触れられることができる滞在体験環境を整備しながら、みんなで大きな共創の象徴としてのハレを作っていく取組が必要ではないかと思う。そういう意味では、アートや文化芸術の力、その国際的な共通言語や、未来につながる地域の創造力で、国際的な発信力をさらに高めていくような戦略はこの地域にあっていると思う。

委員の皆さんや関心ある住民、有志でいずれチャンスを設けて、国内何カ所か一緒に視察研修に行くことを提案したいと思います。

【永原委員】

人材育成とも関わるが、人材流入は考えるといいと思う。広島県尾道市瀬戸田にIターンで宿泊施設の運営を始めた若い人たちがおり、そこから店を展開したり、様々な価格帯の宿泊施設を展開するにあたって、行政や地域の方々ともタッグを組み、街づくりに力を入れながら、拠点を作っていく活動をしている方がいて、確か函館にも入っているはず。そういった新しい風と元々住んでいる方々との融合が、すごく魅力的ですし、新鮮ですし、お互いに刺激を与え合える、学び合えるのは非常に大切だと思うので、補足したい。

3　その他

【木野委員】

NTT東日本 地域循環型ミライ研究所と組んで、南茅部をコアにして、地域住民やアーテ

[7] 旧戸井町、恵山町、椴法華村、南茅部町のこと。

ィスト、色々な研究者や専門分野を持つ方々に参画してもらい共創型のプロジェクトを立ち上げていこうと、南茅部で調査をしているので、その事例を紹介できればと思う。

【進行】

永原委員も、縄文の観光資源としてのポテンシャルについて調査するプロジェクトに関わったと思うで次回ご報告いただきたい。

【永原委員】

過去のものと、今回の視察を経てまた思うところもあったので、改めてお話したい。